様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９８０

研究課題名（和文）質的知覚論の再構築

研究課題名（英文）The Reconstruction of the Qualitative Theory of Perception

研究代表者
佐藤　透（SATO, Toru）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：６０２２２０１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　17世紀に登場した新しい自然観は、外界に物理的な性質のみを帰属させ、その一方で、色や音などの感覚的性質を観察者に位置付けた。しかし、この知覚図式は、外界の事物が色をもつという常識的立場に反するだけでなく、外界に実在する対象が不可知のものとなってしまうという矛盾を含む。
　この研究では、知覚の因果的プロセスに関する科学的証言を尊重しつつ、かつ外界に色などの質的性質を保証するような知覚論を構築し直すことを試みた。その際に、外部世界についての主観的記述を基礎として、そこに因果的プロセスの客観的記述を組み込むことで質的知覚論を再構築することが可能となり、その逆ではないことが示された。

研究成果の概要（英文）：The new perspective on nature in the 17th century attributed only physical properties to the external world and located sensory properties such as color, sound, etc. in the inside of the observer. But this perceptual schema not only goes against common sense, but also has a serious difficulty in that the objects existing in the outer world would become unknowable.
　Then we attempted to reconstruct the qualitative theory of perception which respects the scientific explanation about the causal process of perception and guarantees the outer world to have qualitative properties at the same time. Our main point is that we can construct such theory by basing on our subjective description of the outer world and taking in it the objective description of causal process, but not vice versa.

研究分野：哲学

キーワード：知覚論　感覚的性質　クオリア　知覚因果説

１．研究開始当初の背景

17 世紀に新しい自然観が登場し、外界に実在する物体はロックが第一性質と名付けたような物理的性質のみをもち、色・音・味といったいわゆる感覚的性質は、それら客観的性質によって主観内に惹起されるものとみなされるようになった。こうしたいわゆる知覚因果説は、一方では心身問題を惹起すると同時に、色などの感覚質（クオリア）を欠く外界の不可知論を将来した。人が認識できるものは色などの感覚質を備えたものであるから、その原因となる物理的実在は不可知なものとなる背理を生じるのである。この問題はG・バークリーによっていち早く指摘され、現代に至るまで議論が続いているが、明確な結論に至っているようには思われない。

２．研究の目的

上記物質論・知覚論へのバークリーによる反論を批判的に継承する形で、現代では自然界に感覚的質を回復しようとする知覚論の試み（以下、質的知覚論と呼ぶ）が存在する。フッサールやベルクソンの知覚論はその古典的代表であり、日本の大森荘蔵による「重ね描き」論もまたそうである。基本的方向としては首肯できるこうした試みは、しかし、十分なものとは思われない。本課題は、上記古典的対応や、現代的な議論をも踏まえつつ、従来の質的知覚論の問題点を乗り越え、新しい知覚論の構築を目指した。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するためには、緊密に結び合った以下の三つのプロセスが必要だと思われる。すなわち（A）この問題が近代において発生した歴史的経緯を解明する、（B）この問題に対する現代的対応の是非を検討する、（C）新しい質的知覚モデルを構築する、の三つである。

そもそもデカルトは、何故、質に満ちた自然な世界に背を向けることができたのだろうか？これは立ち止まって考えてみると不思議なことである。デカルトとて常識人として手に持った赤いリンゴを噛んでいただろう。その彼が質的世界を何故、どのように否定できたかは、とくに中世哲学との連続性と非連続性の研究が進む今日、知覚論研究の立場からも十分留意しなければならない（以上A）。

その見極めは、現代においてそうした物質論、知覚論を乗り越えようとする試みの妥当性の判定にも影響してくるはずなのである。歴史的経緯を踏まえつつ、上記問題に対するフッサールやベルクソン、大森をはじめとする乗り越えの試みの体系的整理と、さらに残されている問題の析出がそれに続く（以上B）。

こうした整理に基づいて初めて、有効で新しい質的知覚モデルが構築されるであろう（上記C）。

上記のプロセスを充実させた上で新しい知覚論を展開する過程が最終的なものになる。これらのプロセスは問題の性質上相互に関連し、フィードバックを繰り返しつつ循環的に深められてゆくべきものである。最終的には新しい知覚モデルの大枠を構築することが本研究課題の目指す地点であった。

４．研究成果

上記研究方法の三つのプロセスごとに、研究成果の概要を以下に記す。

（A）問題発生の歴史的プロセスの再検討

本研究の最初のポイントは、感覚質と知覚図式を巡る上述のような問題が近代においてどのように発生したかというその歴史的経緯を明確にし、かつ現代における各種の質的知覚論の試みを、その観点から照射して、それらの有効性と問題点を明らかにすることにあった。

そのためには古代から中世に至る知覚論の詳細な検討が必要になるが、古代中世哲学の研究者による興味深く有益な研究成果を参照することができた。古代中世哲学における知覚論の基本となるのはアリストテレスが『形而上学』や『生成消滅論』などで展開している質料形相論と、キリスト教信仰上の基盤としての『実体変化』に関する教義であり、それらによって、中世までは外界の事物がもつ性質は、確かな存在をもつものと考えられていた。しかし、そうした中世的な自然観、知覚論から 17 世紀になって突如として先の自然観、知覚図式が登場したわけではなく、17 世紀の粒子論哲学の一部を完全に先取りするような主張がすでに 14 世紀になされていたことをパスナウなどの研究者がすでに指摘している（R. Pasnau, *Metaphysical Themes 1274-1671*, Oxford, 2011）。

本研究では、そうした優れた先行研究を参照しつつも、しかしそれだけではデカルト的な、感覚質を外界から剥奪し、その発生を感覚主体に位置付けるような知覚論は生まれないことを確認し、また近代におけるそうした知覚図式の主張者たちが、おそらく触覚の役割を重視することによってこの知覚図式を正当化しようとしていたことをテキストに基づいて示し、さらにもかかわらずこの知覚図式はやはり重大な矛盾を含むこと等を明確にし得たと考えている。この部分に関する研究成果は、佐藤透「不可知の外界―不自然な自然観はどのように生まれたか―」（座小田豊・栗原隆編『生の倫理と世界の論理』東北大学出版会、2015 年、3 月、121-147 頁）にて公表された。

（B）既存の現代的対応の是非の検討

この問題に対する現代的対応の古典としてフッサールやベルクソン知覚論を検討した上で、当初計画にはなかったギブソンとノエ、チリムータのアイデアも検討した。

Ｅ.フッサールは『純粋現象学と現象学的哲学の諸構想　第一巻』（1913 年、通称『イデーンⅠ』）意識体験をあらゆる認識問題の根源をなすものとし、また感性的知覚をその基盤として詳細に分析するが、その際には諸科学による因果的説明は括弧入れされ、人の生活世界的な知覚体験が分析される。リンゴという対象は、「赤さ」を含む私たちの感覚がノエシスによって生化（beseelen）され、志向的ノエマとして成立するという彼の知覚図式は、質的、感覚的要素を知覚世界に残すものである。

人に実的（reel）に与えられる感覚的要素がプラスに拡大されて知覚対象が成立するという、フッサールのいわば加法的知覚論に対して、減法的知覚論とも言えるのが同時代のH.ベルクソンの知覚論である。フッサール同様、バークリーを高く評価する『物質と記憶』（1896 年）のベルクソンは、まず実在する物質を「イマージュの総体」として規定してそこにクオリア（感覚質）を残存させ、かつ生活上の実際的要求による限定を受けて差し引かれたものが、私たちの現実の知覚像になるとするのである。

アフォーダンス概念で知られるジェームズ・ジェローム・ギブソン（James Jerom Gibson, 1904-1979）の『生態学的視覚論』（*Ecological Approach to Visual Perception*, 1979）は彼の遺著となった。ここで採られる知覚の生態学的アプローチは、知覚を環境とその中の観察者を含む生態学的システム全体としてとらえようとする。視知覚は、私たちを取り囲む「包囲光配列」の流動から私たちが必要な情報を「不変項」として取り出す「直接知覚」とされ、網膜像を媒介とした従来の図式は否定される。網膜像が不要であることを実験的に示す試みもなされる。隠される面と隠す面、地面に支えられる身体、頭の動きによる自己認知等、彼の記述は、多分に現象学的なものを含んでいるように見える。

メルロ＝ポンティの身体主観や上記ギブソンの生態学的心理学に影響を受けつつ、環境における行為者としての知覚者の性格を重視するのがアルヴァ・ノエ（Alva Noë, 1964-，カリフォルニア大学バークレー校教授）らのエナクティブアプローチ（enactive approach）である。『頭の外へ』（*Out of Our Heads*, 2009）で彼は、「あなたの目、あなたの頭、あるいはあなたの体の動きは、実際にあなたの目への感覚刺激の変化を生み出している。別の表現をすれば、事物がいかに見えるかは、複雑で精巧な仕方で、あなたの行動に依存している（60 頁）」と述べ、外界と知覚者の一体性を主張する。また心とはこうした「行為」に属するものであり、したがって心が脳内に閉じ込められているという従来の考え方を否定し、心を外界へと拡張しようともする。

ギブソンとノエに共通しているのは、外界からの光のエネルギーが網膜で生理的エネルギーに転換され、それを媒介として視知覚が成立するという常識に深く沁み込んだ従来の視覚図式を否定しようとしている点である。

現代における色の自然科学に広く目を配りながら、哲学的問題を考察しているものとして、M. Chirimuuta, *Outside Color*, 2015（M. チリムータ『外界の色』）がある。著者は、もともと視覚科学の研究者であり、そこから次第に哲学的考察へと進んだ人で、著作の中でも関連する自然科学的知見を引用しつつ議論している。彼女の立場は、色が外界と観察主体のどちらかに帰属するのではなく、知覚という動作自体に帰属するとするもので、相関主義的副詞主義とも呼ぶべきものである。このような立場は、外界と内界の対応という二元論的図式を前提とした知覚の理解を越えようとする野心的な試みとして大変興味深いものである。しかし、著者自身がすでに検討している点の他にも、立ち止まって考えるべき問題点がある。

というのも、客観的・外的世界と主観的・内的世界とを分ける二元論的な考え方には、複数の根拠が関わっているからである。今それを二分するとすれば、〈知覚の外部〉すなわち人が知覚するものの外部が存在するという考え方を促進する根拠と、〈知覚主体の内部〉が存在するという考え方を促進する根拠とに分けられるだろう。二元論図式を覆すにはそれらを逐一検討し、そうした現象に新たな説明を与える必要がある。

我が国の大森壮蔵の「重ね描き」論を含めて、これまでの対応で十分でないと思われるのは、〈知覚過程の時間差〉問題の検討である。これは、〈知覚の外部〉があるという考えにつながる。

色が知覚プロセス全体に帰属する副詞的なものだという見解が成立するためには、知覚プロセスの全体性・統一性が確保される必要があるだろう。というのも、知覚プロセスがその各部分に分割されて理解されるなら、それら各部分が時系列に並べられ、例えば知覚プロセスの最初の部分Ａが原因とみなされ、中間の部分Ｂは媒体とみなされ、最終部分Ｃは結果とみなされることが可能になる。そのように色が最終部分Ｃで結果として生じるという因果的連鎖が想定されると、色は結局このＣに位置づけられることになってしまう。

このような知覚プロセスの分断の有様は、音知覚の場合にはさらに明瞭に理解されるだろう。雷の体験では、ピカッと稲光がしてからゴロゴロと雷鳴が聞こえるまで数秒かかる。光がほぼ同時に物理的変化（空中の放電）の発生を伝えているとすれば、この物理的変化の発生と、雷鳴を聞く聴覚体験の発生の間には時間差がある。聴覚体験の外に物理的原因と空気の振動による伝搬を想定し、結果としての聴覚体験の発生を考えるならこの時間差は簡単に説明できる。この時間的分

断は、音知覚が知覚者の場所で成立していることを有力に証言することになる。
　こうした説明を採用しないとすれば、相関主義的副詞主義は、この分断可能な因果的連続ということを説明しなければならないはずだが、上記著作ではこの問題はまったく触れられていない。そしてそのことは、フッサールやベルクソンの古典的対応についても言えるし、ギブソンやノエについても言えるように思われる。

（C）新たな質的知覚モデルの構築
　上記問題を解決するために、まず人の外界の知覚に関する基本的に性格の異なる二種類の描写が区別されたが、その一つは、いわゆる客観的描写で、上記事例では音源と音の知覚者とをいわば横からみる第三者的実験者からの描写であり、この音源の振動や空気の振動、その知覚者への到達といった物理的事実からなるこの描写は誰でもが確認できるものであって、仮に横描写と呼んでおいた。もう一つは、知覚者本人からの外界の描写であり、この描写内容は音や色といった質的性質を外界に認めるものだが、基本的に第一人称的なもので知覚者個人にのみ属している。これは縦描写と呼ばれた。
　ここでは詳述できないが、外界に質的性質を取り戻しつつ、知覚の因果関係の科学的説明と調和させるには、縦描写を基礎にしつつも、聴覚や視覚といった一種の感覚のみに着目せず、諸感覚間の協働、および間主観的な保証という視点が必要であることが示された。また、こうした検討を通じて、外界の空間的諸位置は、可能的な知覚の中心とみなすべきことも明確にされた。

　（B）および（C）を含む研究期間全体を通じての成果の一部は、佐藤透「質的自然観の再構築―知覚因果説のアポリアを越えて―」（『ヨーロッパ研究』第 12 号、東北大学国際文化研究科（旧）ヨーロッパ文化論講座、2017 年 3 月、pp.65-88）、および 2017 年 9 月 9 日に新潟大学東京事務所で開催された加藤尚武元日本哲学会長を囲む研究会で好評の内に発表され、さらに精緻化の作業を続けている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①佐藤透「質的自然観の再構築―知覚因果説のアポリアを越えて―」（『ヨーロッパ研究』第 12 号、東北大学国際文化研究科（旧）ヨーロッパ文化論講座、2017 年 3 月、pp.65-88）査読なし

②佐藤透「不可知の外界―不自然な自然観はどのように生まれたか―」（座小田豊・栗原隆編『生の倫理と世界の論理』東北大学出版会、2015 年 3 月、pp.121-147）査読あり。

〔学会発表〕（計 1 件）
①佐藤透「質的自然観の再構築のために――諸感覚の協働という視点から―」於：加藤尚武先生傘寿記念研究会、新潟大学東京事務所、2017 年 9 月 9 日

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　佐藤　透（SATO, Toru）
　東北大学・大学院国際文化研究科・教授
　研究者番号：60222014

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　（　　）